2023年3月11日発行

「〈書く〉こと」を書く物語―玉里文庫本古筆『源氏物語』のために(2)

高　木　　信

相模女子大学紀要　　VOL.86（2022年度）

「〈書く〉こと」を書く物語―玉里文庫本古筆『源氏物語』のために(2)

高　木　　信

Narrative to write “why to write”

Makoto TAKAGI

【要旨】

玉里本『源氏物語』「若菜下」巻の末尾には「南無阿弥陀仏」と記される。また、室町時代物語には、物語を「大切だから」「ためになるから」などの理由でこれを読むべしとするものや、後世のたまに筆録したとする作品群がある。物語内容と断絶した形で、仏教的、道徳的な意味合いを物語テクストそのものに持たせようとしている。そしてそのことを知らしめるために物語を〈書いた〉と筆録者（とされる人物）が書き記す。このような宗教的・道徳的な枠組と玉里文庫本の「南無阿弥陀仏」言説との関係を考える第一歩である。

Key Words：筆録　教訓　玉里本『源氏物語』　室町時代物語

〇、教訓的に終わることは

高木［2022］において、鹿児島大学附属図書館所蔵の玉里文庫本の古筆『源氏物語』(以下、玉里本とする)「若菜下」巻の終わりに、二行ほど空けて本文と同筆で「南無阿弥陀仏」と記されていること（武藤［2018a］）の意味を考えるために、室町時代物語の物語末に「南無阿弥陀仏」と記されてる物語をピックアップした。

それらの物語のいくつかには、〈教訓〉的な言葉が書き込まれてもいる。《なにゆえにこの物語が書かれたのか》《この物語を読むことの効用》などが書き記されている。

たとえば、蟹の怪物を退治する物語である「岩竹」の末尾を引用しよう。

①是を御らんする人々は、かりそめに、女房よひける共、やうしんして、よひ候へと、むかしも、かやうの大事、ありけるかと、おもひいたせよ、人人や
南無あみたふつ南無あみたふつ
（二―四三九頁）

「是」というのは「岩竹」というテクストを指している。物語中で女房たちが出かけたとき、怪物にさらわれるという事件が起こった。そのことについて、筆録者は「女房呼びけるとも、用心して呼び候へ」という〈教訓〉を書き付ける。この事件はたしかに怪物の跳梁とその退治譚の発端となる出来事であるが、話しの本筋かというと疑問はある。蟹の怪物・岩竹が人間を襲う切っ掛けとなった、子ども蟹が大仏建立時に潰された死亡したという出来事の方が、「気をつけるべき」こととしてはふさわしいだ

ろう。

だが、事態の軽重はそれほど問題ではないのであろう。書物を「御覧ずる」こと、そして読んだ人々が〈教訓〉的なものを受け止めるであろうことに重心があるのだ。

しかも、「南無阿弥陀仏」で終わる物語は、最終的に（無理矢理にでも）、仏教的イデオロギーへと収斂させていくのである。

［表１］［表２］では、高木［2022］で取り上げた「南無阿弥陀仏」で終わる室町時代物語のうち、〈教訓〉が書き加えられているものをピックアップした（逆から言うと、なんの〈教訓〉も描かれていない物語は、とつぜん「南無阿弥陀仏」言説を「読者に提示しているということなのだが）。

一、筆録された物語は

さて、引用文①の二重傍線部「御覧ずる」はもちろん「見る」の尊敬語であり、筆録者が「見る人」に敬意を払っている。「見る」とは《読むこと＝黙読すること》であり、「読む」は《声に出して読む》ことである。口承文芸と文字文芸との狭間にある『平家物語』を論ずるときに、兵藤［1985］は「読む」ことと「見る」こととの差異を重視していた。琵琶法師が語る『平家物語』は「見る」ものではない。「聞く」ものである。

室町時代物語が先行する物語を文字化したとみずから示す瞬間がある。

２「伊豆國翁物語・天正写本」は、「世の理」を「書き置いた」と口承の物語（であろう）を文字化したことを述べている。書物としてテクストが成立したことを筆録者がみずから書き記している。

この後々のために「書き記された物語」はどのように享受されたのであろうか。もちろん、先行する物語が口承であった場合には、文字化されたテクストと口承のテクストが同時に存在していた可能性はある。しかし、この「書き置いた」という言説自体が、先行する口承テクストがあったかのようにみせる術であった可能性はあるのだが。

二、音読と黙読とは

玉上［1955］は、『源氏物語』を音読する女房とそれを聞く姫君という伝達形式を想定した。「聞く」物語として『源氏物語』があったという指摘である。と同時に黙読する『源氏物語』享受もあったことは『更級日記』にみえる。

> 〔『源氏物語』を〕一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちにうち臥して引き出でつつ見る心地、后の位も何にかはせむ。
>
> （二九八頁）

この現象と同じように、室町時代物語にも、語り物的なナラティヴをもつものもあり、〈語り→聞く／音読or黙読←書物〉と図式化できるような、「見る」享受と「読む」享受形態があった。

［表１］［表２］から、見る系の物語と読む系の物語とをひとまず取り出してみる。

●「見る＝黙読系」のもの
　１「愛宕地蔵物語・古写本」
　３「岩竹　奈良絵本」
　７「うばかわ　奈良絵本」

○「読む＝音読系」のもの
　８「鉢かづきの草子・刊本」
　　※これは「聞く人」とあるので、語り物を聞いた可能性もあるが、文字化されたテクストに書き込まれているので、音読されたものを聞いているととれるだろう。
　９「法妙童子・刊本」
　　※これは「この草子を読む人」と記しながら、「かたりつたへ侍りけり」と口承が背後にあったことを示してもいる。

［表１］ 『室町時代物語大成』(角川書店)・物語末が「南無阿弥陀仏」で終わり、かつ〈教訓〉が書かれるもの。「見る」「読む」には四角囲いを、書物を示す語句には二重傍線、教訓には波線、南無阿弥陀仏には傍線を付した。

通番	作品名	物語末表現	巻数	頁数	段
1	愛宕地蔵物語・古写本	此さうしを見ん人、ちさうのみやうかう、もしは百へん、もしは廿四へん、となへて、ほうかひしゆしやう、ゑかうし給ひ候はは、そのけちゑんによりて、わか身も、ほうかよくほうかよく、しんすへし、なむあみたふつなむあみたふつなむあみたふつ	1	491	上
2	伊豆國翁物語・天正写本	されとも、人間を放れ不、佛けなけれは、恋地を便として、佛道に入しむ 去れは、誰も、憍漫の心を翻して、一筋に佛を敬ひ、神を崇め、僧を供養し、君に使へ、民を憐み玉ふへし 在世発得の夕部には、忉利天に登り、一念随喜の念佛は、遮那の妙行に越たり、狂言たりと申せ共、世の理を書置き侍る也、不可有疑、南无阿弥陀佛	2	311	上 下
3	岩竹・奈良絵本	是を御らんする人々は、かりそめに、女房よひける共、やうしんして、よひ候へと、むかしも、かやうの大事、ありけるかと、おもひいたせよ、人人や 南無あみたふつ南無あみたふつ	2	439	下
4	秀祐之物語（古写本）	この、ことわりを、よくこころゑ、しう、おや、ししやうなとに、かうかうにあらん、ともからは、むかしいまとてへたてなし しよてん、三ほうの、かこあつて、今生、後生、ともに御たすけあるへき事、うたかゐあらす、候はんなり、これにつけても、南無大慈大悲観世音ほさつ南無大慈大悲観世音ほさつ	7	22 〜 23	上 下
5	為盛発心因縁集・天正写本	悪人誘引の趣、顕然なれは、善悪の凡夫、たれか、浄土にのみをたたん、滅罪生善の秘法、弥陀の名号には、しかし、諸衆、声をはけまして、念佛すへし、南无阿弥陀佛（原文は漢字カタカナ交じり文）	9	123	上

6	常盤の姥・奈良絵本【注1】	いやいや、われ、しやはせかひ、（うかりししや はせかい）これもおもひて、なにかせん、あみたほとけの、さうのてし、くわんおん、せいしほさつたち、うはを、みちひきたまひ（たまへとて） なむあみたふつを、となへつつ、かうさにのほり、ねんしゆして、にしにむかひて、ふしおかみ やかて、りんしゆにむかへは、うたかひなかりけり、のちのよまて、かきととめける、ときはのうこそ、めてたかりけれめてたかりけれ あらありかたや、なむあみたふつ	10	133	上 下
7	天神御本地・巻子本	されはにや、かさ木の上人は、人目を忍て、夜半、参詣給けり、一天四海の主、九民百黎乃拙も、首を傾、誠を致して、しかも祈なり 今生一期の、栄花をいやは、深谷の、草の庵に衣をそめ、上品蓮台を傾、万人、観音の来迎に預らんと思は、誰か、北野の天神に、申さらん、南無威徳大自在天神北野	補遺 2	345	上 下

注１　6「常盤の姥」は高木［2021］ではカウントしていなかった。

［表２］『室町時代物語大成』（角川書店）において、物語末尾箇所のなかにの表現に念仏があるもの。
傍線等は［表１］と同じ。

7	うばかは・奈良絵本	これすなはち、大し大ひの御しひなり、これを御らん給ふ人は、なむ大ひ、くはんせをんほさつと、三へん、御となへあるへく候、けんせあんおん、こしやうせんしよ、うたかひなし	2	557	上
8	鉢かづきの草子・刊本	このものがたりを、聞人は。つねに、くわむおんの、みやうがうを、十へんづつ、御となへあるべきものなり なむ大じだいひくわんぜおん菩薩 たのみても、なをかひありや、くわんぜおん、二世あんらくの、ちかひきくにも	10	377	下

9	法妙童子・刊本	此さうしを よむ人 は、たとへ、けむどんほういつの身なりとも、正直にして、一時のくけんを、のがれ給ひ、ましてや、心あらん人は、今生にては、おやかうおやかうの、身と也て、じんぎれいちしんを、本として、下そん下ぞんに至までも、ゑいぐはの家とさかへ、みらいにしては、ごくらくじやうどの上ぼん上しやうの、れんだいに、むまれ給ふ事、何のうたがひか、あらざらん 只一声にても、みだの、みやうがうをわすれさせ給はずして、南無阿弥陀佛、あみた佛と、ぶつみやうを、となへさせ給ひて、かりの、ともなかひたる、もろ人にも、心をゆるし、何事にても、打とけかたる、誠のともと、いひやせんと、かたりつたへ侍りけり	12	394	上

三、教訓を語る物語は

さて、これからは「南無阿弥陀仏」言説をもたないテクストで、〈教訓〉を書き記している物語群をみていこう。[表3] としてまとめたものである。

教訓の内容よりも、〈教訓〉を伝える媒体（音声／文字）と享受の方法（聞く／音読／黙読）に着目することとしたい。

★書くことを書く物語

（タイトルを網かけにした）

3「赤松五郎物語・大永写本」
14「瓜子姫物語　絵巻」
20「木曽よしたか物語」
※「書く」とはないが、「残す」とある。
23「愚痴中将　写本」
※「後の世の例に、筆に任て、書き留めける」ある。

☆「語り」としての物語

22「貴船の本地　丹緑本」
※「申し伝へ」ると〈書く〉物語。

書き記すことの意味を〈書く〉物語が存在すると共に、「聞く」あるいは「読む＝音読する」と〈書く」物語もあるが、しかしそれも〈書かれて〉残されるのであった。

四、課題がまだまだあることは

本稿では、教訓の内容や傾向については言及できなかった。また〈書く〉こと／〈語る〉ことをどのように〈書いて〉いるかを提示することで終わってしまった。

〈教訓〉を書き付ける物語が、「見られた」のか「読まれた」とするかの分類まで行くことができなかった。

本稿で作成してみた表をもとに、〈教訓〉を書き付ける物語を〈見る／読む〉ことの差異をどのように書き付けているかを次の課題として残すこととなった。

［表３］物語末が「南無阿弥陀仏」で終わらないが、〈教訓〉が記されるもの。
「書く」ことに言及してる物語には網掛けを施した。

通番	作品名	表現	巻数	頁数	段
1	青葉の笛	こころあらん人は、このさうしを、さいさい、ききたまふへし しうのおほせを、そむかしと、ぬしをたてつねて、おそろしきところをも、ははからす、又おさなかりしときよりも、ふつほうにちかつきて、ほけきやうをせつのことくたもち、二人のおやの、こしやうをいのり そのほか、三かいの、しゆしやう、てうるい、ちくるいに、いたるまて、ことことく、ほとけになれと、ゑかうせし、この三つのとくに（とくゆう）より、かかるゑいくわに、ほこりたまふなり かやうのこころ、かりそめも、おこしたまふへし、ふつしゆも、えんよりおこるといへは、此さうしを、ききても、たうしんおこし、しんしんりやく、しひ、しやうちき、もつはらにあるへし、よくよくちやうもん申へし、すこしもうたかひ給ふ人あらは、むけんにおち、なかくほとけになるへからす、よくしんかう申へし	1	47	上下
2	青葉のふえ・刊本	みな人、心すかたこそ、かはるとも。中じやうに、おとらぬ心を、もちたまひ候こと。あらまほしきことなり。しんあれは、とくありと、申つだへ（まま）しも。げにことはりとそ、聞へけり	1	56	上
3	赤松五郎物語・大永写本	そもそも、此物語、いたつらなる事を、書置侍て、後にあさけりをを、のこすといへとも、五郎、書留し、筆の跡をたねとして、狂言綺語の言葉をそへて、あさきより、心如実相の、ふかき妙理に入しめ、正覚のいんゑんと、せんためなり 此物語、見聞の人は、佛の御名をとなへて、夢中の方便ともに、ゑかうせしめ給ふへし	1	134	上

4	秋月物語・写本	されは、心正直に、慈悲ふかけれは、観音も、一切、諸の諸佛、菩薩、明王、てんどうも、かけのことく、身にそひましまして、さいなんをのかれ、心のままに、守給ふこと疑なし されはにや、たとへにも、あたをは、恩にて報するといふこと、是也、何事も何事も、そのむくひ、やかて、車の輪のことしと、見えたり 此さうしを、よくよく、御よみあるへく候也	1	232	上 下
5	秋月物語・写本	されは、心正直に、慈悲ふかけれは、観音も、一切、諸の諸佛、菩薩、明王、てんどうも、かけのことく、身にそひましまして、さいなんをのかれ、心のままに、守給ふこと疑なし されはにや、たとへにも、あたをは、恩にて報するといふこと、是也、何事も何事も、そのむくひ、やかて、車の輪のことしと、見えたり 此さうしを、よくよく、御よみあるへく候也	1	232	上 下
6	秋月物語	此さうしを、よくよく、御よみあるへく也	1	233	上
7	朝臣のつゆ・絵入古写本	されば、にんけん、はるのはなと、さかへ、ほこるといへとも、ついにはおとろへ、なつの日にあへる、はなのことし、人おひゆくに、したがひ、あきのくさきのごとく、くろきかみも、もみしも（し）、そのすかたも、やせおとろへ、いそし、むそしを、ふるといへども、つひには、ふゆきのごとく、むじやうのかぜに、さそわれ、つちみつと、きへうせ侍るなり かかるはかなきうきみを、つらつらくわん（まま）、これを御らんずる人は、御心をすなおにして、なさけのみちを、ほんとし、御しやうぼだひの事、かんにようなり されば、ふるきうたにも　世のなかは、ゆめうつつか、うつつとも、ゆめともわかず、ありてなければ	1	420	上 下
8	朝臣のつゆ	これを御らんずる人は、御心をすなおにして、なさけのみちを、ほんとし、御しやうぼだひの事、かんにようなりされば、〔後略〕	1	421	上

9	あみだの本地物語・天文写本	こころあらんひとひと、このきんけんをうたかはん、うたかはすんは、なんそ、ねんふつ一ほんのともからと、ならさらむ、しやうしのいのちは、むしやうなり、はやくねん（まま）ちんをねかふへし、かまへてかまへて、ふしんの人にはみせへからすみせへからす ほんのことくうつし申候、ふしんともおほく候こうけんのひとひと、なをしをかるへく候	1	599	上下
10	石山物語（明歴刊本）	されば、ひかるけんじの名目、五十四帖に、わかてりといへども、大数の名は、三十七巻なり。これ、大日の三十七尊をひやうせり。 そのまきそのまきに、かうしよく、ゆふゑんの、たはふれごとを、かきつらねたりと、いへども、又、無上ぼたいの、たへなる、ことはりを、ふくめり。 しかれば、諸佛の御内証にも、かなひて、ぶつくわを、せうぜしめんといへとも、末代の衆生に、ちぐのえんを、むすばしめ、ずいきのくどくをもつて、げだつのいんと、なさしめんための、はうべんにて、いまこの大会を、おこなはしめ、諸人のさんけいを、すすむる也。 まことに、有がたき、御りしやうにて、慈眼現衆生の、御せいぐわん、たのもしき御事也。	2	246	
11	有善女物語・古写本	いかに、観无量寿経には、五逆の、罪人なれとも、善知識の、すすめによりて、弥陀の名号を、称するものは、一念に、八十億劫の、生死の重罪を滅して、金蓮華に乗して、極楽に往生すと、とけり されは、大悲経には、人をすすめて、念佛の行者と、なすは、大慈大悲の、至極なり、衆生の苦をぬきて、楽をあたふるゆへと、ほめたり、あなかしこあなかしこ	2	526	上下

13	梅津乃長者・梅若本	されは、人、まつしといふとも、むさほるこころを、うしなひて、しやうちきをまもり、しんしんをいたし、神をうやまひ、ほとけをたつとみ、奉るときは かんおう、あらたにして、りやくを、かうふり、ひんなるものは、ふくをえ、いやしきものは、くらゐに、のほりなとして、世に名をあらはすものなり 心あらん人、ねかはくは、あさける事なかれ	2	578	下
14	瓜子姫物語・絵巻	かやうに、くわほう、めてたき人の、すゑの世までの、ためしにもとて、しるしをき侍り これを、御らんせむ人々は、神ほとけを、うやまひ給はは、行すゑ、はるはると、さかへさせ給ひ候はん事、うたかひあるましきこと也	2	616	上 下
15	戒言・永禄写本	もつはら、だいにちへんぜうの、ごへんさとみえたり、をろそかにも、かひぬるかひこを、あつかふことなかれ　わたにねりしせんにんは、りやうじゆせんのしやかむにぶつなり、なほさりにおもふこと、もつたいなき、しだいなり あなかしこあなかしこ	3	381	下
16	蛙の草子・絵巻	悦て、やかて、聟にとりつ、ゆゆ敷、富さかへて、約束のまま、ほくら作、拝殿なと、たてて、御神楽、ふたんの法華経、供養法なと、さるへき社社に、おとらす、行けるとなむ	3	386	上
17	花情物語・写本	是を見ん人人は、弥弥、後生の心さしふかく、ほたひの道を、ねかふへしねかふへし	3	419	上
18	神代小町・奈良絵巻	よくよく物をあんするに、かのこまちと申は、大日如来のへんさなり、かりに、このしやばせかいに、むまれて、女人の身と、あらはれ給ふといへとも いせもの道を、しり給はす、一さいのなんしに、ぼんなふのきづなを、たたしめんかために、うつくしかりしかたちを、へんしつつ みにくきすがたをあらはし、百とせのうばとなりて、はぢをろとうにさらし、さまよふと見えしか、つゐにその身のはてなかりしこと まことに、ありかたかりし、方便なり	3	479	上
19	唐崎物語	よろつのほとけの中にも、くわんせおんは、りしやうあらたにましませは、世の人、あゆみをはこふへし	3	533	上

20	木曾よし高物語	此さうし、御らんせん人人は、みなみな、ねんふつ申させ給ふへきなり これも、うき世を、ゆめとしれとてや、うつつに、ふてのあと、のこするらん	4	41	上 下
21	貴船の物語・古写本	されは、この神のはしめを、うけ給は、恋をは、人のすへき物なり、恋ゆへ、神とあらはれ給ふなり、うたかいなくしんすへししんすへし、あなかしく	4	68	上
22	貴船の本地・丹緑本	きふねのみやの御ほんぢ、これなり。よくよく御しんかうあるへしとかや、申つたへ候なり	4	92	上
23	愚痴中将・写本	是と申も、あまり、正直第一の人なれは、沸神納受、ましまして、極楽へ、ひかへとり給ふそ、まことに有難、おほえける むかしは、か様に、智恵なき人も、有けるや、末世には、いかかあらん、後の世の例に、 筆に任て、かきととめ侍りけるそ	4	151	上
24	熊野の本地の物語・大形奈良絵本	この物かたりを、一たひよめは、一たひくま野へ、まいりたるうちにいる、ひやくたひも、十たひも、又かくのことし、このさうしを、もちえさる物は、こんけんの御にくみを、かふむりて、ひんくうの、ほうをうけ、こせには、あくたうへ、おつるなり このさうしを、しんしてよめは、こんけんの、御よろこひたまひけり、南無せうしやう一しよ大ほさつ、りやうしよこんけん、やくしにより、にやく一わうし、一まむのけんそく、十まむの、こんかうとうし、くわんしやう申たてまつる	4	167	下
25	熊野の本地・杭全本絵巻	此くまのの、ほんかいをもち、しんする人は、くまのへ日ことにまいるに、むかふへしと、御たくせんなり かみは、ほんしを、あらはし申せは、御よろこひの、まゆを、ひらきたまふなり、ゆめゆめ、うたかいたまふへからす、うたかいたまふへからす	4	193	上

26	熊野御本地・和元絵巻	そもそも、くまのつこんけんと申は、日本第一(の)、大りやうこんけんにて、まします、しゆしやうりやくの、御ひくわん、よにすくれ、おはします 一度まうつる、ともからは、なかく、三つ八なんの、あくしゆをはなれ、十あく五きやくの、さいしやうも、此ちをふめは、たちところに、しやうめつして けんたう二せの、しよくわん、しやうしゆの、れいせう、むかしよりいまに、いたるまて、おほし、かそふるに、いとまあらされは、ふてにのせす、はんへるなり 御くまのつ、御ほんかいを、もちいしんつる人は、ひとことに、まふてまいらする（に)、ことならす これ、わたくしにあらす、こしんの、いひたつたへし、ことはなり、かへすかへすも、うたふこと、あるへからす なむせうしやうてん、りやうしよこんけん、にやく一わうし、十まんせんしよ、一まんの（こん）かうとうしと、あさゆふ、となへたてまつるへしへし	4	213	上
27	くまつ本地・刊本	よくよくこれを、たもたん人は。こんじやうもよく。ごしやうも、ほとけにならん事。ゆめゆめ、うたがひあるへからす。こころへへし。なむきめうちやうらい。日ぽんだい一。りやうしやうこんげん。しよしやう一しよ。にやく一わうじ。十まんぜんしよ。一まんのこんごうどうじと。 あさ夕、となへたてまつるへし	4	249	上
28	熊野の本地・絵巻	此ものかたり、すこしも、うたかふ事なかれ、もし、うたかふ人あらは、このよにては、その身、ひんにして、おもふ事、かなはす、らいせにては、かならす、あくたうにおつへし、よくよく、つつしんてよむへし なむきみやうちやうらい、日本大一大りやうこんけん	4	271	上

29	しみづ物語（刊本）	是を み聞ん、ともがらは、男女にかぎらず、念沸をとなへ、くわこしやうりやうを、とふらひ。我身のわうじやうを、ねがふべし なむ、きみやうちやうらい、きみやうちやうらい	7	89	下
30	酒飯論（絵巻）	されは、上戸も下戸もみな、中道はなれぬ物なれは、酒とみつるも、ゑいてけり、飯と思ふも、空なれは、わか身はなれて、さとりなし、心の外は、ほとけなし、自性法身あらはれて、即身成佛うたかはす、南無三宝南無三宝 世の中に、すむ仲成か、心中に、中道の理を、さとりぬるかな	7	250	下
31	天照大神本地・写本	此御ゑんきをは、ふちやうなる、所にては、ゆめゆめ、 よむ へからす、一と よみ 申せは、三とまいりたるに、おなし御事なり 又、月の十六日ことに、あらよねをして、みきをまいらせて、これを よみ 申せは、よろす、なんなくて、神明の御まほり、あるへきと、御ちかひなり	10	31	上
32	道成寺物語・万治刊本	かかる、しゆせうの、御法にあひて。じやだうを、まぬかるるのみならず。天上にむまれし事。只此経の、とくなりけり	10	124	上 下
33	七くさ草子・絵巻	このゆらいを きかん 人々は、しんきをもつはらにして、おやに、かうかうをつくし給はは、いまの世なりとても、大しやうのことくの、さいはんにあはん事、うたかふへらす、されは、ふるきことはにも、父母天地のことし、主君は日月のことしと、あるものをや 人としてたしなむへきは、ふんのみちなり、こころにかけておもふへきは、まつ、おやには、かうかうをつくし、つまには、守節をもつはらにすへし おいたる人をは、かりにも、あなとるへからす、をのれより、おさなきをは、いとをしみ、あいをなし、ひんなる人あはれみめくみて、しひこころ、かりにも、わするへからす、佛をねかひて、そうほうしを、くやうすへし かくのことくあらんは、この世にては、ふつきえいようにほこり、らいせにては、ふつほさつの、くらゐを、うけん事、うたかひあるへからす	10	188	上 下

34	花つくし・正保刊本	此さうしを、見たまはん人は。しひ、しやうじきを、もつはらにして。とんよく、じやけん。れんぼ、あひしう。もろもろの、あくごう、ぼんの（ぼんなふの）、大てきの、きをひかかる時は。にんにく、じひを、たてにつき。めやうがう（めやがうの）、りけんをもつて。これをしつめ給ふべし	10	467	上
35	花みつ・奈良絵本	これを、見きかん人々は、よくよく、あくしんを、はらひつつ、こしやうを、ねかひ給ふへきなり 世の中は、さきみたれる、花なれや、ちりのこるへき一えたもなし	10	500	下
36	花世の姫・刊本	此さうし、見たまはん人には、なさけあるへし、又、かのあきのふうふうものとも、ふつきゑいくわに、さかゆる事も、心のじひありて、人になさけの、ふかきゆへなり よくよく、じひしんの心、ふかくして、人をあはれみ、なさけを、かけたまふへし なをも、ちかいの、ありかたき、くわんせおんを、しんし申、一心に、たのみたてまつらは、つゐに、のそみを、かなへつつ、けんせあんおん、こしやうせんしよに、いたるまて、うたかひなし かへすかへすも、しひも、あさゆふ、おもふへし	10	559	上
37	松虫鈴虫讃嘆文・写本	念佛往生をとけんと、思はん人は、往連を、手本とすへきものなり、たた信心決定して、念佛申たまはは、松虫、鈴虫、往連と、ひとつ蓮に生せん支、なにのうたかひ、□□□□（アルキヤ　か）□□□□（アルキヤ　か）	12	631	上 下
38	月かげ・奈良絵本	これひとへに、いつくしまの大明神、清水の観世音の、御はからひと、聞えける、たた人は、情ふかく、神佛を、たつとみあるへしとの、御ことなり	補遺2	253	上 下
39	白身房・写本	親の子を思ふ道は、人間は不及申、鳥類畜類、虫けら、蚤虱までも、替る事、更になし 此一巻一覧の人々、一返の御回向に可預候也、穴賢賢賢	補遺2	407	下

40	一本菊・奈良絵本	いまもむかしも、中ころも、くはんせをんの御ちかひ、いつにおろか、ましまさねとも、ありかたりし、ひくはんかな、かやうにゆゆしく、さかへたまふとかや	補遺2	473	下
41	富士の人穴・写本	まことにまことに、こんけん、あらたに、たつとく、おほへけり、いよいよ是に、うたかいを、なすへからす、あいかまいてあいかまいて、はんはん、しんすへし ふしの人あなの物かたり、けんてうなり、うたかいなく、ねんふつ申へき事、かんねうなり	補遺2	491	上 下

【参考文献】（初出年次→実際に参照した文献の刊行年次）の順に示した。

岡嶌偉久子［2010］：『源氏物語写本の書誌学的研究』（おうふう）

高木　信［2022］：「南無阿弥陀仏で終わる物語―玉里文庫本『源氏物語』のために（１）」（「相模女子大学紀要　85」）

玉上琢彌［1955→2003］：「源氏物語の読者―物語音読論」（『源氏物語音読論』岩波現代文庫）

兵藤裕己［1985］：『語り物序説』（有精堂）

武藤那賀子［2018a］：「玉里文庫本古筆源氏物語（鹿児島大学附属図書館所蔵）再考（一）」（鹿児島国際大学「国際文化学部論集　19-2」）

武藤那賀子［2018b］：「玉里文庫本古筆源氏物語（鹿児島大学附属図書館所蔵）再考（二）」（鹿児島国際大学「国際文化学部論集　19-3」）

【使用本文】表記は私に改めたところがある。

室町時代物語は『室町時代物語大成』（角川書店）、『更級日記』は小学館新編日本古典文学全集に、玉里本『源氏物語』は、『源氏物語』原本データベースを参照した。（https://genjiito.org/update/genjigenpon_database/）

※本稿は、科研費・課題番号：21K00319（研究代表者：武藤那賀子）の成果の一部である。

（たかぎ・まこと／本学教授）